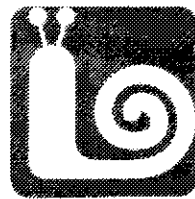


創立三十五周年 記念誌



札幌不動産リスティング協会



目次

21世紀を迎えて 一当協会の再生と転換一	広田 聰	2
協会の文化一その軌跡と展望	藤田 紀郎	3
創立35周年によせて	綿引 榮	5
ビジョン委員会を振り返って	堀井 眞吾	6
ビジョン委員会からの答申	細井 正喜	7
協会事業の抜粋写真		10
創立35周年記念沖縄旅行 行程		13
創立35周年記念沖縄旅行 参加者名簿		15
沖縄「北風の碑」について	坂野 利満	17
創立35周年記念旅行記	中山 幸夫	19
沖縄の釣り 一針千本一	大久保 英明	22
創立35周年記念旅行	安和 良一	24
沖縄旅行 思い出の写真		25
特別寄稿 遥かなるキリマンジャロに挑む	小林 修	27
写真 LOLC・編集後記		31

札幌不動産
リビング協会

21世紀を迎えて —当協会の再生と転換—

会長(平成11年4月～) 広田 聰



20世紀末から21世紀にかけて、私達の国は政治の場・経済の状況・教育の現場等、あらゆる方面においてその構造的な歪みが露呈し始め、混乱が続いております。この混乱の原因は従来より行われてきたパッチワーク手法(つぎはぎ対応による先送り対策)では、もはや日本丸は浮上できない事が明らかになったものと思われま

す。ずばり言えば、政治家も官僚も経済人も、誰一人としてこの国の本当の姿が見えず、巨大な国の借金(666兆円)に対する長期的な展望と対策を打ち出す事が出来ないという恐ろしさです。高度経済の成長とバブルの到来により拡大し続けた経済のパイが毎年毎年小さく縮んで行く時、多くの業界・企業はすばやく前向きに確固たる対策を打ち出す事が出来ない状況にあるものと思われま

ところで、私達のリスティング協会を振り返ってみますと、皆さんの記憶の中に今でもはっきり残っているものと思えますが、創立25周年記念事業を華々しく行ったのはバブルの絶頂期であった平成2年でした。

その後、平成5年には既に組織のリストラ対策を検討し、実行してきました。この時より20世紀末まで組織の新しい求心力、付加価値を高める為の努力が続けられてきました。

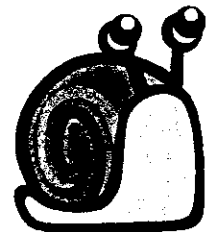
長南名誉会長の言葉によりますと「当協会は「活発な経済活動」とく大いなる友愛精神」の2本の触手を持ったアメーバのような海綿状の組織体である」と言われ、また藤田相談役は「機能的集団を目指す風変わりな村落共同体の様な組織」と表現しています。両先輩の組織の型に対する考え方はそれぞれ共通点があると共にまた個性が顕れていると思われま

す。私流に考えますと、「知恵と忍耐力を兼ね備えた絆の組織」であると思えます。35年の年輪を経て、お互いの個性と価値観を全面的に否定する事なく、その良い所を見る知恵と組織の内外における競争に耐えてきた忍耐力、この2つが前向きに存在してきた組織であると思われま

私達の組織は21世紀を迎え、すぐ目の前に押し寄せて来ている大きな社会構造の変化、即ち(1)少子高齢化社会の到来、(2)高度情報化社会への移行、(3)地球規模の環境問題の発生等—これらの事を踏まえ、平成12年(2000年)2月に「5年先の当協会の歩むべき方向性」を考える為ビジョン委員会を設置し、その答申を受けて組織の新しい目的を検討しました。

その結果、臨時総会を開いて「本会は不動産業務の専門職としての資質向上及び情報交流の場として、本会を通じて会員相互の利益・発展・幸せを図ることを目的とする」と改めました。従来より当協会の創立の原点であり目標であった「マルチプルリスティング」の旗とその効果測定手段としての賦課金制度を廃止しての再出発です。

今後の組織の存亡は、文字通り会員の組織に対する情熱と積極的な参加意欲の表現に他なりません。新しい21世紀には社会構造の変化をとらえ、チャンスに結びつける努力が必要であると共に全員一人一人の幸せを考え、心の豊かさを求める事も大切であると思えます。私達の心の奥底に根付いたリスティングの絆が益々深まり、熱く燃えそして人生の最高の宝物となるように全会員の英知を結集しようではありませんか。



協会の文化 — その軌跡と展望

相談役 藤田 紀郎



ここに創立30周年記念誌「三十年の歩み」があります。私は、ご挨拶のような短い文章「組織のかたち」を書きました。皆さんには、中身なんかもうすっかり忘れていらっしゃると思いますが、この文章に書いてあることを縦軸に今日の話をさせて頂きます。

この中で「目的をもっていた集団(マルチプルリスティングによる斡旋機構)は、早い時期に崩壊した。いまここに根付いているのは、なにか村落共同体のような組織だ—」

ここでは、昭和40年代のリスティング協会は、なにか村落共同体のような組織だといっているのです。

まあ、学問的意味で、厳密に社会学とか文化人類学上での「村落共同体」ということではありませんが、単純に「ムラ」とか「群れ」の集団という意味ですから、そんな表現でもよいと思いますが。ここでの「ムラ」集団では一メンバーである仲間同志が、お互いに気を許し合い、なあなあで通るような人間関係を結んでいます。このハイ・コンテクストな人間関係は、時の経過と共に更に濃密になっていきます。仲間同志では、お互い見ない振りをしながら、じつは実によく観察していて分かり合っているようなところがある。いやらしい集団でもあります。

入会希望者についても、会の雰囲気壊すとかが壊さないとかが重要な決め手ですから、会員と「ウマ」が合うかどうか大切なことになります。

この集団の核になるといいますか、根底にあるものは、メンバーが居心地がいいとか座り心地がいいということが重要なものなんです。

これは、リスティング協会の固有な「文化」が形成されたと見て良いのではないのでしょうか。

ここでいう「文化」とは、難しいことではなく会員お互いが、会に対する物の見方、考え方をある程度共有しているということです。

価値観の共有というほどのものでもありませんが、月例会の在り方、会議の進め方、冠婚葬祭のこと等々、皆が納得して行動しているということです。

会員間のルールが暗黙のうちに了解されているといえます。

現在でも、この固有な「文化」を引きずっているところがあります。



皆さんには、「文化」というと、何か高尚なイメージをお考えになるかもしれませんが。例えば「文化遺産」「世界文化遺産」などですが、これらは目に見える「文化」です。

北洋銀行の武井会長が拓銀との合併騒ぎのとき、北洋には固有の文化があり、拓銀とは相容れないという話があつて、北洋の文化とはなんだろうと思っていましたが、先月のことでしたが、高向頭取が例えば顧客にあげるお土産を、「北洋では(贈答品)というが、拓銀では(媒体品)というんだ」という話が新聞に載っていましたが、これなんかも目に見える「文化」なんです。単純に呼び方の違いでもよさそうです。

「文化遺産」などは、ほとんどが目に見える衣・食・住にかかわる有形の「物質文化」なのですが。

10年間で形成されたリスティング固有な「文化」は、実に観察されにくい、外部からは見えにくい「精神的な文化」なのです。

内在的なもので、日本人の義理人情意識のようなもののようです。

やっかいなこの「精神的な文化」というのは、人為的に短期間で強制的にかえることが困難なものなのです。

ちよいとグローバルなお話になりますが、戦時中の日本でも同様なことがありましたが、あのナチスのヒットラーが、政権を取りますとそれまでの様様な様式を変えていきました。挨拶は、右手を挙げて「ハイル・ヒットラー」の敬礼を政治的に要したりしました。

また、イランのホメイニーでは女性にチャドルの黒衣を被せました。中国でも、毛沢東の晩年、例の「文化革命」と称して毛語録を振り回していました。

このような「精神的文化体系」を私が変えたというのでしょうか。あとで私が「ホメイニー」とか「ヒットラー」とか言われたのもこういうことだったのではないのでしょうか。なかなか鋭い観察です。いいところを突いています。

この「精神的文化体系」は、会員の居心地のよさを考えて、お互いに利害をあれこれ調整しながら運営していく組織なのです。

ご理解頂けましたでしょうか。

こういう組織のリーダーは、通常強力なリーダーシップを必要としないのが特徴的で、ただ組織の「和」の統合の中心的存在であればよろしいわけで、世話役、或いは仕切りの調整役であればよろしいということです。

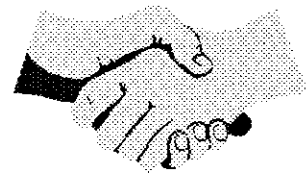
私にとっても、この群れの集団は、大変居心地のよいものでありましたが、70年代に入りますと、何とも言われない「閉塞感」といいますか、閉じ込められたような焦り「焦燥感」に囚われました。私もまだ30代でした。仕事に追われる毎日でしたから—そんな感じになったのでしょうか。

ここでちょっと、調度10年前のロス旅行のことを思い出しました。

韓国人街のことです。司馬遼太郎が「アメリカ素描」の中で、ハングル文字が氾濫する韓国人の街についてこんな風に表現しています。

「外国人から見れば、ハングルという文化（特殊性）は、ありふれたもの（普遍性）に対する鋭いトゲのようにも感じられる。

また自己の特殊性（文化）についての誇示ともとれるし、更にはアメリカという広い海の中で、懸命にイカダを組んでいるけなげさとも見受けられる」と。



この頃、不動産業界も大きく揺れ動いていました。第一次オイルショックから、これまでの高度成長の歪みが吹き出て、倒産が相次いで起こりました。

外には冷たい風が吹いていたのです。隙間風のように、それは組織の中に入り込んで来ました。

私達の組織も、広い不動産業界の中であって、何かあてどなくイカダを組んでいるけなげな集団ではないのか。そんな思いにかられる「閉塞感」「焦燥感」ではなかったのか。

では何故、この群れ集団の固有な文化を超え、新しい機能集団として生まれ変わることが出来たのでしょうか。

私は、組織には成長していくという宿命があるんだと思います。これは企業も同じです。

これは精神論ではありません。それでは何故そのような宿命があるのでしょうか。

簡単に言えば、組織とか企業には「学習能力」があるからだと思うからです。学習によって成長するということです。学習によってエネルギーが蓄えられるということになります。

ここで創立の「原点」に立ち返ろうという意欲が「機能集団」に生まれ変わらせたということです。

原点、それは「マルチプルリスティング」即ち「共同斡旋」です。創立35周年を迎えて、今年7月の臨時総会では、会則の「目的」を変更し、「共同斡旋」方式を廃棄しました。退路を断ち切った再出発となります。

会員の皆様が、多様な価値観を包み込んでいく組織を求めた結果だとは思いますが、この集団的気概が、新しいエネルギーを蓄えて、揺るぎない文化を創出することを念願しています。

平成12年11月12日

創立35周年に寄せて

前会長(平成7年4月～平成11年3月) 綿引 榮



私がリスティング協会に入会したのは昭和59年7月ですが、その前年先輩会員のS氏より「仕事と勉強をしている会があるので入会しないか」との誘いがあり、軽い気持ちで入会をお願いしたところ今、会の組織強化ということで法人化を進めているのでしばらく待つて欲しいとのことで、しばらく待たされた後、入会を許されたのですが、その待機中「会はこの様なこともやっている」のと言って冊子を渡されました。

それは昭和58年7月発行の「首都圏調査視察報告書」でした。

読んでみて、会員一人一人の飛躍につながる活動を主眼に活発におこなっている会であることが分ったのと同時に、今までの私の仕事が如何に場当たり的であったかと反省した次第です。

この頃の業界は、媒介制度が出来たり又、流通面においてもFAX導入や大手の近代的な情報サービスが始まり、近代化の波は生き残りを賭けた競争の舞台へと否応なしに立たされた中で、これからは自分のレベルアップを図り、又、大手との連携を強めなければ取り残されることになると感じました。

経済は円高不況からの回復、内需拡大の為の金融緩和と結び東京のオフィスの需要拡大で地価の上昇と株高が一気に燃え上がりバブル景気に突入、会の賦課金も大幅にアップし、入会2、3年の私は、会員皆さんの仕事ぶりには大変驚き刺激を受けたものです。

会の活動も活発で私も第5次調査団の一人として福岡に派遣されたり、年間を通じ、税、法、経済と実践的な研修での知識習得など、レベルの高い会の一員になれたことを誇りに思いました。

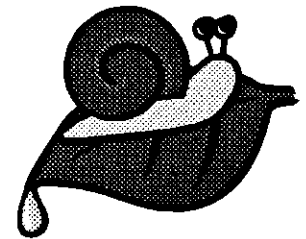
やがて過熱した地価も不動産関連融資の総量規制、土地対策の規制強化により一気に下落に転じ、まさか「失われた10年」と言われる平成不況の始まりになるとは、この時は予想もしませんでした。

長い不況のトンネルに入っていた平成7年突然、会長をやれとの話があり再三辞退したが聞き入れられず、悩みぬいた結果引き受けることとなりましたが、私以上に心配したのは会員の皆さまであつたろうと思います。リーダーとしての資質のない自分がこの伝統ある会を弱体化させるのではないかとこの想いは、その後4年間いつも頭から離れませんでした。

組織の運営に対し、自分はどの様に対処すべきかまったく分からないままでスタートを切ることになり、随分会員や理事さん方に迷惑をかけたり、助けられたりと無我夢中の4年間でした。

目標を高く掲げてきた伝統ある会のお手伝いをすることは、自分自身の勉強にもなりと言いつつも自分なりに頑張ったつもりですが、振り返ってみて、これといった実績を残せなかったことは残念なことでした。

二十一世紀に入っても止まらない不況の中で会の運営はますます困難を伴うと思いますが、我々の拠り所である札幌不動産リスティング協会がこれからも精力的な活動を行うことを期待しております。



ビジョン委員会を振り返って…

専務理事（平成10年1月～） 堀井 眞吾



平成11年度総会にて、綿引前会長から「伝統と実績を築いてきた我が協会をより発展させるため」その指針を策定する特別委員会設置が提案されました。これを請け付けられた「ビジョン委員会」に理事会を代表して参加しましたが、選考された他のメンバーと真剣な討議を重ね答申に至った喜びは今でも忘れられません。

長い長い時間の委員会を振り返りますと、引継ぎ陣頭指揮を取った広田会長からの注文でもある「忌憚りの無い意見で…」というものは勢い個人的主義主張が前面に出る傾向があったし、「協会のために…」という話になるとどうも評論家的で現実離れしたりして全く噛合わないことばかりだったような気がします。また、具体的には会員の誰をイメージして将来像を考えるのか？や「村の仕来りや掟と長老の賢慮」を如何に融和させるかに大変苦労した事を思い出します。

偏に座長の尽力とご苦労により纏め上げられたこの答申は、何処の組織にでも当てはまるものでは全く無く、まさに35年の歴史と伝統をもった我が協会の現状に対するビジョンであり、今のメンバーと共に40周年を迎えるための道標である事を確信いたします。

以下にその延々開催された委員会の経緯と答申を記します。

日付	項目	内容
11/6/29	第2回理事会	ビジョン委員会設置決定
11/7/6	<ビジョン委員会メンバー公募>	
11/8/3	第3回理事会	諮問テーマ・メンバー選考
11/9/9	第1回ビジョン委員会	設立趣旨説明（広田会長） 委員会開催要領 座長選出（細井正喜） 検討項目
11/9/24	第2回ビジョン委員会	会長指針検討項目の絞込み
11/10/13	第3回ビジョン委員会	個別テーマの検討 アンケート作成
11/10/25	<会員にアンケート実施>	
11/11/15	第4回ビジョン委員会	アンケート集計・検討
11/12/20		各自レポート提出 意見集約
12/1/20	第5回ビジョン委員会	答申書完成・慰労会
12/2/1	<答申書を会長に提出>	
12/2/22	第6回理事会	答申書内容報告審議
12/3/3	3月例会	答申書内容報告

5年先の当協会の歩むべき方向性を考えて

ビジョン委員会からの答申

当ビジョン委員会は、会員の承認の下で理事会からの諮問を請けて5年先を見据えて当協会の存続の仕方と歩むべき方向性について、熟論を重ねて参りました。

また、ご周知のとおり会員の現状認識を把握する意味でアンケート調査を実施し、全体傾向を咀嚼考慮したことも付加え、アンケート集計結果も本答申に添付致します。

委員会では、会員全体の志向や会の現状を考慮しながら社会的変革も踏まえての議論が行なわれ、けっして曖昧な結論ではなかったと信念して下記の通り答申致すものであります。

答申に先立ち、まずは当協会のこれまでを振り返りその上でこれからの行方を答申致したいと考えます。

当協会は、已年大不況下の中で不動産業が業界を構成するに間もない、いわば不動産業の黎明期であった昭和40年1月に「マルチプル・リスティング方式」を基本に9社の会員を開祖として発足致したものでありますことは、皆様も周知のことと存じます。

戦後の復興景気とともに経済情勢は激動し、一時的に沈静化したように見えた時期もありましたが、結局は平成のバブル崩壊までは、地価は上昇し続け、業界も拡大の一途でありました。そうした経済情勢の中で「業者の資質の向上とモラルの確立」或いは「職能に誇りを持つ業者の交流の場と全土的物件情報の交換の場」を提供してきたのが、当協会の意義であったといえます。（片や、リクレーション協会と揶揄された時期もあったようですが…）昭和50年代に入り、信託銀行や大手不動産業者との業務提携が成立していく中でマルチプル・リスティング方式は、紆余曲折の中でも成功への道を進んでいたであろうと思います。そして、昭和59年の（株）リスト設立まで。

（株）リストは、当協会創始の共通課題「マルチプル・リスティング方式」の総仕上げだったのかも知れません。

直後に過去に例を見ない金融機関の融資の放出、地価の暴騰、会員の著しい増加、そしてバブルへの突入。

結果、賦課金納入率の著しい上昇。これを以って【設立当初の目的は達成した】ものと考えてよからうと思います。

では、マルチプル・リスティングの終焉からどう転換していくべきなのか？難題ではありますが、社会的要請の変化を振り返り委員会の結論を導いたのであります。

一、時代の大きな変革と社会的要請の変化

1. 平成2年7月の国土法監視区域100㎡実施及び金融引締めにより、不動産は一転膠着し始めました。
2. 土地神話の崩壊、媒介契約制度の施行による情報の公開化、情報誌による消費者への直接情報の放流等々。
不動産業界は、過去の形態を大きく転換せざるを得ないほど変革してしまっただけであります。
3. 更にはパソコンの普及により、情報流通はどんどん変化していつていきます。（昭和40年代にもコンピューターの洗礼を受けた不動産業であります、が、「不動産業の特性」に負けたコンピューターが新たな改革の先鞭をきってきた）
4. 特に、インターネットの普及によりアメリカでは不動産業者が恩恵を受けていますし、わが国においても新築分譲マンション等の成約に一躍をかけていることは事実です。
また、不動産オークションまでが台頭し始めています。

5. その社会的要請の変化を我々は見過ごしていいのだろうか。
社会要請に応じて我々も「2000年を機に新生 リスティング協会の創生と転換」を実施・運営していかなければならないのではなかろうか・・・と考えます。

二. ビジョン委員会の提唱

1. 時代はどういう方向に走っていくのか？そして その時代に適応する会を運営するためには、何をどうすればいいのか？を討論してみたが、【会の継続という観点からではなく、「発展的解散を考慮した上で」現在の会員で「新しい会を発足」しようとしたら、どういう会でどういう目的をもって発足させるのかということ念頭に、意見を出し、ビジョンを策定しなければならない。なんとなく変えるというのでは、ビジョンの意義をなさないのではないか】との方向に意見がまとまったところがあります。
2. それではそれを前提に、基本的な当協会の柱となる 会の目的 会の事業 会の目標 自体から検証してはいかがか。という前提でビジョンを提唱することとしました。

三. ビジョンの答申内容

1. 会の目的は、共同斡旋から密度の濃い情報交流の場創りへと変化していくべきと考え、「不動産業務の専門職としての資質向上及び密度の高い情報交流の場として本会を通じて会員相互の利益・発展・幸せを図る。」と改正すべきであろう。
2. これに伴い、会の事業は、
ア、会の結束による人脈と情報交流の場の提供
イ、付加価値情報の追求と創生
ウ、土地の歴史的情報の流通
（例えば、一会員が売却物件を受けた時に他の会員が過去にその物件または近隣の物件を扱ったことがあり、売主の特徴とか物件の瑕疵等について、積極的に情報提供できるようにする。等）
エ、資質の高い研修と専門分野のレベルアップ、密度の高い情報交換の場造り
オ、インターネット等による情報流通システムの構築
カ、全員参加の会造り
キ、その他会の目的に添う事業
というような項目に変更し、
3. 会員構成については、
ア、時代の趨勢、現在の会員構成から考えると「会員の資格は、不動産業務を行なう免許業者であり、代表者または代表者の認諾を得た取引主任者である社員であること」とし、不動産業務事業者が会を構成していることを前提に、仲介主力業者のみならず業種を広げて人脈創りや多面的情報交流の場とすべきであろう。
4. 賦課金制度については、
ア、前述のように変更すると、賦課金制度というものは会の趣旨に適合しなくなり廃止という結論に達することとなる。
イ、賦課金制度の廃止という結論に達すれば、自ずと会の運営資金となる会費の見直しである。
5. 会費の見直しについては、
ア、委員会としては、現在のような会の運営方法の維持でよければ、会費を本則の月額5,000円に戻すことによって、賦課金に依存しない且つリスティングネットワークを取込んだ運営は可能であろうと考え、月額5,000円会費を提唱します。
しかし、5,000円のままでいいのか？例えば7,000円にするとしたらどういう事業が新たにできるのか、逆に値下げするとしたらどうすればいいのかについての議論は、会員の討論に委ねたいと思います。

6. 例会の運営方法については、

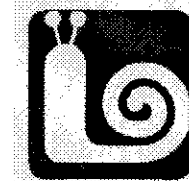
- ア、例会方式のマンネリ化は起こりつつあり、起爆剤の投入も考えなくてはならないと思われます。（タイトとルーズの混合体組織の組成）
イ、現在のような月例会までの回数にしろとも隔月でも良いという意見はあるものの、前述のように「親密度の高い交流の場」であることを考えると逆行する意見であり、例会という形は2ヶ月に一度としても、研修会やセミナー等の積極的導入により、より質の高い会としなければならないと考えます。
ウ、2ヶ月に一度の例会は懇親会を取り入れるものの、研修会やセミナーの開催時には飲食は必要ないのではないのでしょうか。
エ、また、会場設定等の見直しも効果が出るのではないのでしょうか。
7. 研修会及びセミナーのあり方については、
ア、会員内にも種々分野の精通者がいると考えられ、会内部での勉強会を促進すべきです。（会員同士による不動産市況の報告会や取引裏話等の交流機会設定）
イ、毎年決まった時期の研修会は、恒例化し年中行事に盛込めば講師の手配も楽になる筈です。
ウ、会員の実務における問題提起と解決方法勉強会を実施すべきです。
エ、業態別研究グループを発足させ、研究結果を例会で発表し、会員の情報共有化を計ってはいかがでしょうか。
8. 理事会、委員会のあり方
ア、理事会の議決事項が十分に会員に反映されていない気がします。理事会通信や委員会通信等の手法により、もっと、例会までに会員が質問したり意見を出せるように分り易い報告にしていけるべきです。
イ、会員数の割りには理事が多すぎます。理事は、会員数の一割程度でいいと思われまし、且つ、半数ずつ時期をずらした任期にする事で継続性のある理事会運営も可能だと考えます。
ウ、理事の選出方法については、毎回どうしようというのではなく、明確な選出方法に確定させるべきです。
エ、その上で、会の方針は会員からの互選で選ばれた理事が決定して頂くべきだと思います。
9. その他
ア、従来の提携企業との取組みを根本的に見直し、会員に有益になることを目的としたルール創りをした上で新たな提携方法を再構築する必要があると考えます。

以上 をもって、ビジョン委員会の諮問に対する答申と致します。

平成12年2月1日

ビ ジ ョ ン 委 員 会

座長	細井	正喜
	島瀬	欽司
	堀井	眞吾
	大久保	英明
	中山	勝
	中川	功
	茅野	眞司





平成9年4月 第35回総会



平成9年12月 忘年会風景



平成10年4月 第36回総会



平成10年1月 新年交礼会



平成11年1月 新年交礼会



平成13年1月 新年交礼会



平成9年5月 観桜会(積丹岬)



研修風景



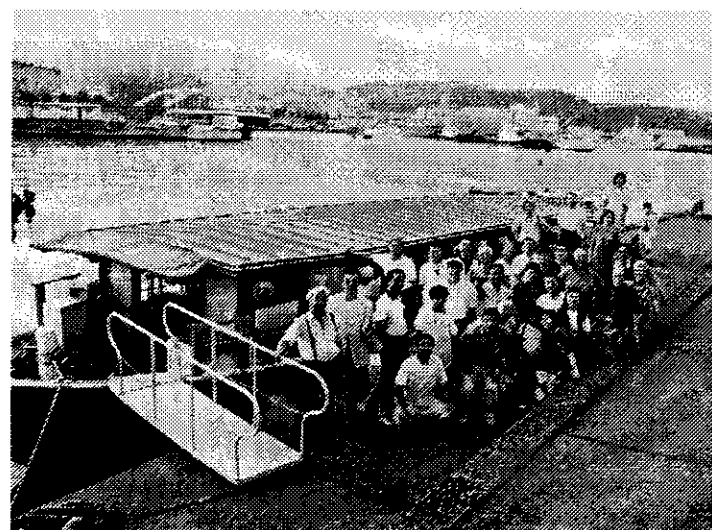
平成10年5月 研修観桜例会(支笏湖丸駒温泉)



平成10年8月 納涼例会(パークゴルフ大会)盤溪



平成11年8月 納涼例会 小樽ベイシティー



札幌不動産リスティング協会 創立35周年記念旅行行程

平成12年11月11日(土)～平成12年11月14日(火)

No	月/日	主 行 程	お土産
1	11/11 (土)	10:15 全日空 291便 新千歳空港 → 14:05 那覇空港 → 〈海軍壕〉 → 〈平和の礎・資料館〉 → 18:40頃 各ホテル → 19:30～ 〈夕食は、料亭にて琉球舞踊を 観ながら琉球料理〉	タピオカ、ハチマシ、ジャム、ドライフルーツ
2	11/12 (日)	8:00 各ホテル → 〈琉球村〉 → 〈万座毛〉 → 〈沖縄サミット 会議場見学〉 → 名護 〈森のガラス村〉 (琉球ガラス) → 〈沖縄フルーツランド (パイン園見学 昼食)〉 → 許田IC → 沖縄北IC → 〈東南植物楽園〉 → 〈首里城〉 → 17:10頃 各ホテル → 18:30～ 〈ステーキハウスにて夕食〉 → 各ホテル	〃
3	11/13 (月)	終日 自由行動	〃
4	11/14 (火)	ホテル〈出発まで自由行動〉 (各自1時間前 空港集合) 14:30 全日空 292便 那覇空港 → 17:30 新千歳空港	

※交通機関の都合等、やむを得ない事情により、時刻・行程に変更のある場合もありますが予めご了承ください。

1日目

1	11/11 (土)	10:15 全日空 291便 新千歳空港 → 14:05 那覇空港 → 〈海軍壕〉 → 〈平和の礎・資料館〉 → 18:40頃 各ホテル → 19:30～ 〈夕食は、料亭にて琉球舞踊を 観ながら琉球料理〉
---	--------------	--

☆海軍司令壕跡

太田美司令官と部下4,000名がここで自決し、壮烈な最後を遂げた。壕は地下30mに造られ、延長1,550mあったうち、現在、225mが発掘されている。壕内は迷路のようで、司令官室・幕僚室・作戦室などがあり、ひんやりと冷たく無気味である。

☆摩文仁の丘

田園地帯に盛り上がった標高80m余りの丘で、背後は隆起サンゴ礁の海岸絶壁。太平洋戦争最大の激戦であった沖縄戦の終焉の地としてあまりにも有名であり、悲しみに包まれた悲劇の丘である。摩文仁の丘東側は平和祈念公園として整備され、昭和53年には平和記念堂が、昭和54年には、沖縄戦没者墓苑が建てられた。また平和祈念資料館もある。なお、丘上には各県の沖縄戦での戦没者慰霊塔が整然と並び、厳肅な雰囲気漂っている。

☆平和記念資料館

白亜の鉄筋コンクリート造の建物で、摩文仁の丘の東下に立つ。ここでは沖縄戦での住民証言を第一級の資料として位置づけており、こうした記録を中心に写真、模型、遺品など約1400点が展示されている。

☆ひめゆりの塔

県立第一高等女学校・沖縄女子師範学校の生徒・教職員で結成されたひめゆり部隊の204名を祭る慰霊塔。特志看護婦として従軍した姫百合部隊は、昭和20年6月19日、米軍に包囲され、この壕内でわずか4名を残して玉砕した。現在、昭和21年に建てられた小さな塔のほか、りっぱな石碑が立ち、碑前には花や千羽鶴が供えられて涙をさそわれる。

2日目

2	11 12 (日)	8:00 各ホテル——〈琉球村〉——〈万座毛〉——〈沖縄サミット 会議場見学〉——
		——名護〈森のガラス村 (琉球ガラス)〉——〈沖縄フルーツランド(バイナ 園見学 昼食)〉——
		——許田IC——沖縄北IC——〈東南植物楽園〉——〈首里城〉——
		17:10頃 18:30— ——各ホテル——〈ステーキハウスにて夕食〉——各ホテル

☆琉球村

沖縄各地から80～100年前の民家が移築され、当時の姿のまま再現されている。5,000匹のハブがいるハブセンターも見どころ。

☆万座毛

毛とは芝原の意味で、村の中心近く、隆起サンゴ礁の断崖上に広がる高麗芝の平坦地である。むかし尚敬王が諸国巡視のおり、ここに立寄り、その広大さに「万人を座らすに足る」と感嘆したといふところからこの名が起ったと伝わる。

☆東南植物楽園

植物園と水上楽園からなり、総面積約40万㎡に達する。植物園は、ヤシを主体にマンゴーやピロウなど、熱帯・亜熱帯植物が林立し、まるでジャングルのような。特に、ヤシの種類は多く、質・数ともにわが国屈指である。

最近、珍しい昆虫を集めた世界の昆虫館も完成した。水上公園は6つの池を中心として散歩道が縦横に通じ、その両側はヤシ並木となっている。

☆首里城

首里城は、那覇市内で最も高い弁ヶ嶽に連なる丘陵地に築かれている。首里城の創建年は明らかではないが、一説には、琉球を統一した尚巴志王が、王都を首里に定めてから1879年の琉球処分までの約450年間、国王の居城であったと伝えられている。

創立35周年記念 沖縄旅行参加者名簿

札幌不動産リスティング協会35周年記念旅行参加者名簿 (順不動：敬称略)

	氏名	会社名	会社住所	電話
1	遠藤 忠雄	(有)天富商事	札幌市北区新琴似2条6丁目2-1 天富ビル	(011)761-7851
2	鎌田 俊雄	鎌田商事	・中央区南21条西13丁目2-7	・ 561-0365
3	中山 勝	(有)大洋流通企画	・ 北区新川5条1丁目4-6	・ 747-5445
4	吉田 幸子	大黒屋不動産商事	・ 中央区南14条西11丁目1-11	・ 561-1841
5	横田 匡晴	(株)道和商事	・ 白石区南郷通7丁目南2-16	・ 866-7788
6	俣野挺四郎	俣野商事	・ 中央区南17条西6丁目3-8	・ 531-3339
7	大西 壽子	まつば商事	・ 豊平区中の島2条5丁目1-24	・ 821-1314
8	石川 英一	(株)財宅企画サービス	・ 白石区本郷通13丁目南5-1	・ 866-8460
9	石川真知子	〃	〃	〃 〃
10	小林 修	小林住宅(株)	・ 豊平区平岸4条14丁目1-12	・ 831-8570
11	小林 暁子	〃	〃	〃 〃

札幌不動産リスティング協会35周年記念旅行参加者名簿 (順不同：敬称略)

	氏名	会社名	会社住所	電話
12	石田 勤	芳見商会	札幌市中央区南16条西10丁目2-14	(011)521-3417
13	石田 澄子	〃	〃	〃 〃
14	上村 忠章	(株)一条不動産	・ 中央区南2条東6丁目1	・ 231-1110
15	伊藤 満	(有)いとう企画	・ 中央区南22条西8丁目1-37 新藤ビル	・ 513-0577
16	三浦 悟	あびす拓建(株)	・ 東区北14条東14丁目1-22	・ 741-3786
17	大久保英明	(株)オークボ企画	・ 手稲区曙5条2丁目6-1	・ 682-3567
18	明円 英博	札幌ホーム	・ 北区麻生町2丁目2-2	・ 747-9530
19	西部 早哲	札幌緑地都市(株)	・ 中央区北1条西3丁目 札幌中央ビル	・ 231-3075
20	江良 義哉	三栄住宅流通(株)	・ 豊平区平岸4条9丁目15-15	・ 823-7763
21	野水 守	のみず不動産	・ 清田区6条2丁目13-3	・ 882-1608
22	水野 弘作	(有)北海道興信土地	・ 中央区南5条西8丁目12-3 第3さっしんビル	・ 531-2277

札幌不動産リスティング協会35周年記念旅行参加者名簿 (順不同: 敬称略)

	氏 名	会社名	会社住所	電話
23	若松 和史	札幌不動産商事(株)	札幌市中央区南1条西13丁目4 リハウスビル	(011)231-7377
24	鳥瀬 欽司	(有)鳥瀬事務所	札幌市中央区南1条西10丁目3-23	729-2885
25	源藤 義幸	藤ホーム(株)	札幌市中央区南2条西13丁目319-9	261-2610
26	前野 健一	(有)ホームデザインセンター	札幌市中央区南17条西9丁目2-23-507	511-6986
27	広田 聡	(株)みたか商事	札幌市中央区南1条西11丁目 南1条ビル	281-3111
28	広田美貴子	"	"	" "
29	菊池 大蔵	(株)オークラホーム	札幌市豊平区平岸2条7丁目1-13	841-1945
30	金山 公彦	(株)かなやま	札幌市白石区南郷通12丁目北1-15	865-6611
31	関谷 真理	(株)札幌いずみ産業	札幌市豊平区月寒中央通7丁目2-8	855-5565
32	茅野 眞司	大真商事(株)	札幌市中央区北1条西27丁目5-1	644-5353
33	山本 高明	拓祐実業(株)	札幌市中央区南18条西16丁目2-3	561-9311

札幌不動産リスティング協会35周年記念旅行参加者名簿 (順不同: 敬称略)

	氏 名	会社名	会社住所	電話
34	田村 政義	(株)タムラ興産	札幌市中央区北3条西25丁目1-17	(011)611-0451
35	堀井 眞吾	(株)中央宅建	札幌市中央区南11条西9丁目2-3	531-0161
36	細井 正喜	(株)トラスト・コーポレーション	札幌市中央区南3条西13丁目 アーク・ステージ	221-0041
37	中山 幸夫	(有)中山土地建物	札幌市中央区北7条西22丁目2-10	621-6916
38	長谷川義信	(特 別 会 員)	札幌市東区北31条東8丁目1-19	742-6898
39	山本 栄二	(株)栄不動産商会	札幌市西区西野8条9丁目10-5	663-1949
40	綿引 栄	第一住宅(株)	札幌市西区二十四軒1条4丁目3-7	644-2258
41	南雲 州治	(有)南広	千歳市南富2丁目1-27	(0123)23-3997
42	安和 良一	"	"	" "

沖縄「北霊の碑」について

特別会員 坂野 利満



協会創立35周年おめでとう御座います。
また、沖縄行きの記念旅行に参加出来なかったことは残念に思っていますが、記念誌に寄稿出来る事はこの上ない幸に存じます。
この文の作成にあたっては、私の兄が首里附近で戦死した時の報告や、戦後の沖縄戦史沖縄本島旅行時に聞いた事柄を組合せて稿を草します。

昭和16年12月に太平洋戦争が勃発し、米国、中国と戦う事になった。当時、ソ連とは、不可侵条約が結ばれてはいたが、満州の北側黒龍江を挟んで対峙するソ連軍は、世界最強と言われていた。

満州警備の任を負っていた日本は、これに対抗すべく関東軍を編成し国境の街、黒河・密山・東安等に拠点を置き、軍備を増強した。

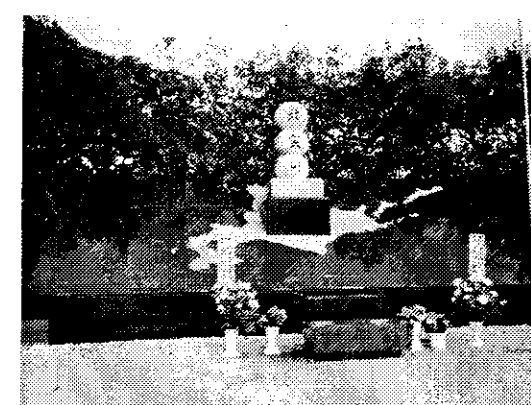
昭和17年、私の兄は徴兵検査で甲種合格となり、2ヶ月後に満州国東安の部隊へ入隊を命じられる。それが、山部隊(実は師団であり、戦時機密で部隊と称した)で、主に北海道出身者で編成された一万人規模の大部隊であった。

戦争の範囲が徐々に拡大する事により兵員の不足を感じた軍は、今まで現役二年の制度を三年にし、その不足を補おうとした。

兄は昭和20年春に除隊になるも、即現地召集となり元の部隊に戻されたのである。この山部隊は、関東軍の中でも最強の軍団と自慢していた部隊である。

日本は万一の時皇室護持のため、その皇室を満州に移動させる計画があり、そのためのために温存していた部隊でもあった。しかし、南太平洋の戦局が急を告げ、サイパンが陥落し東京が米空軍の爆撃圏内に入る。

大本営は次の米軍の上陸目標は台湾であろうと予測し、今まで温存していた虎ノ子の満州にいる三個師団に対して、台湾に移動する命令を下したのである。これで東洋一を誇っていた関東軍も骨抜き状態となったのである。ソ連参戦後の満州の惨状を見ると分ってもらえると思います。



日本は兵員の輸送に船を集め駆逐艦護衛の下で台湾に向け出発するが、米軍が制海空権を握っている東支那海では、九州から琉球列島沿に南下する以外ルートが無かった。

しかし、出発した翌日には米国の潜水艦に船団は捕捉されてしまう。船団は危険を感じて急遽、沖縄本島的那覇に寄港し、一度全員揚陸し時を見て再度、台湾に向かう事になるが、船腹は漸減して移動可能は二個師団となった。

沖縄に残されたのは山部隊である。

米軍はこの師団の移動を見届け、沖縄の防備が薄くなったと判断し、四月に入ると沖縄本島に上陸を開始した。在沖縄の牛島軍司令官と長参謀長は、本島中部首里付近を防衛の天王山と考え、山部隊を核として三万の主力を此の地に終結させた。

だが、残念なことにすでに日本は沖縄への物資の補給路は完全に遮断されていた。兵員は増えたが物資は手持ちの物のみであった。



日本軍は米軍の砲爆撃を受け、貴重な食料・弾薬を失うのであった。軍は最後の手段として、三四人でグループを作り夜陰に乗じて、米軍のキャンプを襲い食料や弾薬を奪う作戦に出るのであった。所謂挺身切込隊である。当然米軍に発見されると射殺された。私の兄もこれで戦死したと公報にありました。

米軍は豊富な物量で日本軍の陣地を破壊し総てを焼き尽しながら前進し、日本軍の陣地は順次壊滅されていった。牛島司令官は中部での戦闘を諦め、南に下って態勢を立て直しを計ったが日本軍は大半の火器を失い、食料もなく戦闘力はゼロに等しかった。この時の撤退作戦で、地元の中高校生が軍に協力し多大なる犠牲を出した事は痛恨の極みです。

一方、山部隊の生き残りの兵は南下を始めたが、摩文仁丘まで到達することなく、東風平（コチンダ）で全滅してしまう。戦いはまだ続き、摩文仁丘に残った兵を集め、洞窟を利用して抵抗を試みたが、その甲斐なく牛島司令官と長参謀長は6月23日自決して組織的な戦いは終わりを遂げるのであった。米軍の記録によると、摩文仁丘には坪当たり360発の砲弾を打ち込んだ計算になり、生きた人間が居ることが不思議と言われたのである。

4月に始まった沖縄本島での戦いは6月に終わり死者は、民間人12万人軍人10万人と記録されています。

一道一都二府43県の兵10万人の内、北海道出身者が一割を占めている事を考えますと、北海道人の犠牲が如何に多いか想像出来ると思います。

この様な事から道内の遺族が集まり、山部隊最後の地、東風平に慰霊碑を建てる事となり、道内の市町村から一個づつ石を持ち寄り、碑台に埋め込み「北霊碑」を作ったのです。

その後、都府県が戦い終焉の地に慰霊碑を建てたので、各地の碑が全部「摩文仁丘」にあると思い、北海道から行った人は「北霊碑」を見つけることが出来ず、苦情が出たことから、この碑も摩文仁丘に移設したのです。

これで全国の碑が一箇所に集まったので、沖縄県は戦争の遺跡として保存すべく、国に働きかけをしたところ、国では昭和47年5月15日沖縄戦跡国定公園として指定し今日に至るのである。

昨年、会員の皆さんが摩文仁丘で目にした木々は、全部昭和20年以降に生えたものである事を附記致します。

平成13年2月15日

創立35周年記念旅行記

(有)中山土地建物 中山 幸夫



11月13日午前8時、気にかかっていた前夜の雨もどうやら止んで、延泊組15人の内、山本高明、山本栄二、長谷川義信、綿引 栄の皆さんと私の5人がジャンボタクシーに乗り、沖縄ワシントンホテルを出発した。

早速、私がドライバーに予め作成していた行程表を渡すと、楽しみにしていた、「幸地腹門中墓（こうちばらこんちゅうばか）」と「松山御殿」は案内できないとの事。少し気落ちしたが、先ずはドライバーが勧める首里の玉陵（たまうどうん）に向かう。

この玉陵は国指定の重要文化財で1501年（弘治14年）、琉球第二尚氏の2代目の国王、尚夏によって築かれ第二尚氏王統の陵墓となる。

墓域は2,442㎡、墓室は中室、東室、西室の三つに分かれ、全体の造りは、当時の板葺き屋根の宮殿を表した石造建築物である。これを拝観して、往時の琉球王朝の権力と豊かさが伝わってくる思いがする。

次の目的地は金城町石畳道だ。タクシーは走り出して間もなく、住宅街の道路脇に停まる。ドライバーが「ここです」と指差す方向を見ると、間口3m60cmほどの小路の入口に、「史跡、金城町石畳道」と標された、高さ1m50cmぐらいの棒標が立っている。

ここは地元の人以外は気付かずに通り過ぎてしまうような処だ。ドライバーに坂下の出口で待機するよう指示し車を降りる。

石畳道は琉球石灰岩を敷き詰めた長さ約150mほどの急な坂で、15世紀末から16世紀初頭の尚真王時代に南部への主要道路、真珠道の一部として整備されたという。この石畳と両側に並ぶ民家の石垣が醸し出す沖縄情緒をじっくりと味わって、次の泡盛の醸造所、瑞泉酒造に向かう。

瑞泉酒造は、旅行まえの予約では午前9時であったが、30分ほど遅れて到着した。幸い他の見学者はおらず、早速我々グループに女性社員一人がついて醸造行程の説明と質問に答えてくれる。

説明によると、泡盛はタイ米を原料に黒麹で作る蒸留酒で沖縄の焼酎である。また、泡盛は長く熟成させるほど味も香りもまろやかさを増して美酒となるという。業界では、3年以上熟成された古酒を半分以上含むものを、アルコール度数に関係なく「古酒」と表示できる。としているそうである。

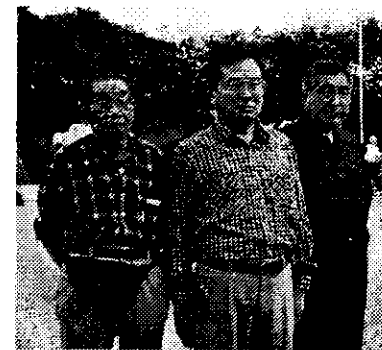
最後にお決まりの泡盛の試飲となったが、私以外の人達は試飲して「旨い」と言うので、私は、懐と相談しながらお土産に3本送ってもらおう。

試飲コーナーの壁に見学者の記念色紙が貼られている。我々も残そうと相談し、綿引さんが代表して色紙にサインする。

いつの日か再び訪れ、色紙を確かめ懐かしむ日が来るかも知れない。

次に、国指定特別名勝、識名園（俗にシキナヌドゥンと言う）を観賞する。識名園は琉球王家最大の別邸で、国王一家の保養や外国使臣の接待などに利用された所といわれる。ここは、「回遊式庭園」で近世に日本の諸大名が競って造るようになった造園方式で、池に浮かぶ島には、中国風東屋の六角堂や大小のアーチ橋を配し、池の周囲には琉球石灰岩が積みまわされ、なんとなく異国情緒が漂う庭である。

これより首里を離れて南部方面に向かう。途中ドライバーが観光船で魚の群れが見られる穴場があるという。その穴場の奥武島（おくたけじま）に行く。



本島と島をつなぐ短い橋を渡り、小さな港の船乗り場に到着し、すぐグラスボートに乗り込む。船底の中央部にガラスが張られ、覗くとコバルト色の海水がとてもきれいだ。

まもなく船頭は300mほどの沖合に船を走らせる。ポイントに着くと船底に数種類のきれいな魚の群れが見える。そこで船頭が巧みな操船で餌を撒くと更にたくさんの魚が集まる。なにか養殖されている魚を見るような感じがしないでもない。そんなポイントを三ヶ所ほど見てから港に戻る。

船頭の説明によると、この奥武島はその昔、死者を風葬したところだという。風葬された情景を空想している内に、その風習がいつの時代まで続いていたのかは聞かなかった。奥武島を出ると空模様がおかしくなり、小雨が降り出した。

車は、つぎの見所、ひめゆりパークに到着したが、雨はまだ止む気配がなく、ドライバーから傘を借りて入園する。

ここは、サボテン園である。広いこの園内は傘をさしながら歩けるものではない。しかたがなく観覧車に乗って回る事にする。大型のサボテンや観葉植物が植えられていて、すばらしいところであるのだが、観覧車の窓にはビニールの雨除けというのか、風除けみたいなのが吊り下げられていて、雨で濡れて甚だ見通しが悪い。それに結構気温が下がり肌寒い。これでは気分が冴えない。

10分余りも乗っていたら、出発場所に戻る。そばにレストランらしき建物があるので、サボテンのステーキが食べられるかもしれないと期待して入ってみたが、その期待は外れて刺身のように切られたアロエの切り身が売られていた。

そのアロエを食べて旨い。と勧めてくれるが食わず嫌いの私は遠慮した。お昼も過ぎたので、近くのドライブイン風の食堂に入って昼食を取り一休みする。



昼食を終え外に出て見ると雨は止んでいる。ここから沖縄本島最南端の沖縄戦跡国立公園、喜屋武岬園地(きやんみさきえんち)に向かう。そこは、私はこの沖縄旅行が決まったときに、最初に訪れたいと思った念願の場所である。それは以前にテレビのドキュメンタリー番組で、米軍が海上から撮影したもので、地元民が米軍の攻撃から逃げ切れず喜屋武岬に追詰められ、岬の断崖からこぼれ落ちるかのように投身する多数の人々の姿が忘れられずにいたからである。

この岬の展望台から海を見下ろすと、崖の高さは、60mか70mぐらいもあるだろうか。海岸は黒々とした岩場で、もし飛び降りたらたちまち今生とのお別れになってしまうような所だ。あまり広くない展望台入口には、平和の塔が建っている。長谷川さんが一昨日の北霊の碑に参拝した時のように直立不動の姿勢で拳手の敬礼をする。

平和の塔には「第六二師団管下部隊は喜屋武複廊陣地において摩文仁の第三二軍司令部向け進行を続ける米軍に対し最後の迎撃を続けしが善戦空しく昭和二十年六月二十日玉砕せり。

昭和二十七年十月地元民は將兵並びに戦斗に協力散華せる住民の遺骨併せて一万柱を奉納し平和の塔と名づけしがこのたび南方同胞援護会の助成を得て新たに塔を建てその遺烈を伝う。昭和四十四年三月。財団法人沖縄遺族連合会」と刻まれている。

しかし、この刻まれた文言には、多数の島民の悲惨な犠牲があったことを窺うことはできない。

真実は人々の記憶から遠く遠く忘れられていくのだろう。割り切れぬ思いのまま、戦争犠牲者の冥福を祈って、那覇市内の福州園に向かう。福州園は面積8,500㎡、平成3年9月に造られたもので、かつて琉球の大交易時代、沖縄文化に大きな影響を与えた中国の建築様式で、福州の名勝をイメージした「千山・烏山・屏山」「白塔・烏塔」などを配置し、また池や欒山、滝、中国の樹木や彫刻があり、観光スポットとして見ごたえのある場所であった。

福州園を出て、一旦ホテルに戻り身軽になってから、この日最後の見学場所、牧志公設市場までドライバーに送ってもらう。

公設市場ではロブスターの夕食にしようと相談しながら、喫茶店で一服しているうち、おっくうになりホテルに帰って食事をする事になる。

ホテルでの夕食で、酒のメニューを見ると泡盛の銘柄が「久米仙」の一種類しか載っていない。メイドさんに聞くと「久米仙」以外は置いていないという。

地元のホテルが推奨して出す銘柄だから上質のものだろうと思う。ということで、注文した皆さんは、これは「旨い」と満足して飲んでいる。



それを見て私は、翌日のことだが、空港の売店で「久米仙」の価格を調べてみると、「久米仙」の3年ものは、他社銘柄の5年ものと同じくらいの価格であった。それでも「久米仙」を買って行く観光客が多い。ということは、良く知られている銘柄なのであろう。つい、つられてわたしもまた一本買ってしまつた。

11月14日、当初時間的に無理だろうと考え、行程にいれていない中部地区の中村家住宅を見学するため、午前9時ころホテルを出発する。途中、米軍嘉手納飛行場や反戦地主の問題でしばしばテレビに登場する「象のオリ」と言われる米軍の通信所を見る。

中村家に行く途中、地名は忘れたがドライバーが、観光客を案内するのは初めてという、米軍が沖縄戦で本島に最初に上陸した場所で、米軍の猛攻撃にさらされ、村民の50余名が非難し、逃れられずに自決したという洞窟に案内される。

そこは、周りが雑草に覆われ直径が10m前後、深さ3mぐらいの穴の中にあり、階段を下りると、穴の西壁の下部に高さ1m、横4mほどの洞窟がある。その奥行はどのくらいなのか暗くて見通せない。洞窟の入口には沢山の折り鶴が供えられ、また洞窟内には多数の遺骨がそのまま残っているとのことで「立ち入り禁止」の立て札がある。

洞窟の遺霊に合掌し、一人遅れて階段を上がると、誰かが怨念の墓があると言う。振り返ると穴の東側にひっそりと小さな墓が建っている。それを見ると「知念家」と刻まれているのだが、皆が感じたように、私も「怨念の墓」と思わずにいられなかった。

この旅の最後の見所、沖縄の代表的な豪農屋敷跡、中村家住宅を見る。この建物は国指定の文化財で、日本建築と中国の歴史を伝える貴重な財産として、いつまでも大切に遺してもらいたいものだ。

全日空機は定刻の午後2時30分、那覇空港を離陸し、沖縄南部沖の上空を左旋回しながら北に向かう。南部海岸線を俯瞰して、この旅で強く脳裏に刻まれた喜屋武岬と摩文仁之丘の横に、黒く縁取られた断崖を確かめているうちに、やがて視界は雲海に覆われた。

平成12年11月12日

沖繩の釣 — 針千本 —

釣浪人 大久保 英明



ともかく沖繩の魚は「デカイ」 出発前に取寄せた釣り雑誌の写真を見て、期待に胸膨らませ、振出竿をカバンに忍ばせての出発。

2k~3kは小さい方で、釣糸は太目、釣針も大きめ、タモが無いと上げられないとか・・・地元釣道具屋の電話情報。情報の集めすぎで何を準備してよいのやら・・・まあ釣キチにとって準備迄が楽しい世界なのである。

琉球舞踊のあと、2次会のスナックでハナ、ハナ、の特訓を受ける。しかし心は釣りの事、今晚にするか、明日の夜にしようか迷う時間、もう11時を過ぎた、釣の立会人はすでに出来上がっている。タクシーで5分位の所が、今回の釣場『泊漁港』である。

どうも気になるので、寝る前に釣場の下見をする事にした。ホテル前にたむろしているタクシーに飛び乗る。『泊港迄たのみます。』 運転手：『エッ?港?何しに行くの?』 客人：『チョット釣の下見に...』 運転手：『.....』。

どう見ても釣の格好でない客人を見て『お客さん、もっといいもの釣れる所へ行きましようや』しつこく夜の町への勧誘である。押し問答している内、港の近くに24時間営業の釣具屋の明るい看板が目に入ったので助かった。

港には、10組位釣人が居た。土曜の夜だ、皆車横付、アベック釣が2組、そのアベックのお兄チャンの釣った魚を見せられたのが大きい、40cm位はあるか『何んと言う名前の魚?』と聞いたら、『解らない。』と云うのである。その答えには驚いた。彼は魚より隣の女の子が、完全に釣り上げられるのかどうか問題のようである。

魚は居る!。 エサ屋はある!。 港で足元は明るい!。横着者の釣り場としては最高の場所だ。明日が楽しみだ・・・。

ステーキハウスのあと2次会はあきらめホテルへ・・・、立会人も沖繩の夜の探索で忙しいとか。釣道具を持ってホテルの前のタクシーへ、なんと?昨夜の脂ぎった小太り運転手のタクシーが一番前に居るではないか、今度は格好を見ておとなしく港まで運んでくれた。

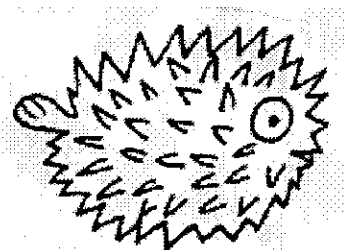
24時間営業の釣具屋で餌の仕入れ、ピョンピョン飛び跳ねている活きエビが最高と進められるまま1バック買い込み港へ。

先客は昨夜より少ない3組。ウキウキしながら'第1投'夜光灯付の浮き釣りだ、5分もしない内、大きく竿がしなる。『重い』蛸ではないか?と胸が躍る。

どうにか埠頭の縁に魚体のカタマリがたどり着く。おそろおそろ足元に釣り上げた、そこには見たこともない魚体がグツタリとして横たわっている。どちらが頭か解らぬ?ズングリムックリだ!そして、トゲトゲしいエラが幾つもあるのである。

それが2時間で3匹も釣れた、あとは真っ赤な魚1匹だ。

昨夜のお兄チャンが釣ったスマートな魚は、今日は休みのようだ。



ハリセンボン

時計は12時、立会人へ携帯電話で報告。2次会疲れて声が眠っている。さて、釣果はあったが名前が解らぬ??先客は帰った後、日曜の夜は、釣師は早く帰らなければならないのである。

エサを買った24時間営業の釣具屋へ、店のオヤジ：『これは、針千本だよ!』『エッ?』私は針千本と云う名前は、はじめて聞く名であった。『食べれますか?』『いや、これは河豚の一種で、資格が無いと料理が出来ないんだよ。』

24時間営業で疲れた感じの店主、重々しい説明に、ホテルの近くの居酒屋で料理でもしてもらおうか?の計画もあきらめざるをえない。

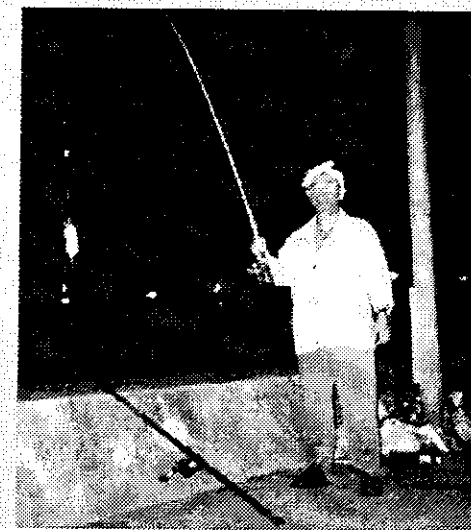
沖繩の夜はまだ暖かい、後ろ髪を引かれる思いでホテルへ。

最終日は自由行動、国際通りをブラついていると中山さんと横田さんにバッタリ合う。昨夜の事を報告すると、さすが船釣師の中山さん!針千本は詳しい、『針千本は毒の無い河豚』との事、後の祭りだ。

3人で公設市場へ、まんまるにふくらんだ針が無数に出ている魚が、魚屋の看板にブラ下がっているではないか。見覚えがある!これが、針千本とは?

昨夜はグツタリとへたった針が100本であったようだ。オコゼと針千本を捌いてもらい、2階のツバメ食堂へ。さしみ、唐揚げ、みそ汁、久々の珍味に3人大満足!店内は活気がある、沖繩は明るく元気だ!なにより、雪が無いのが最高!!

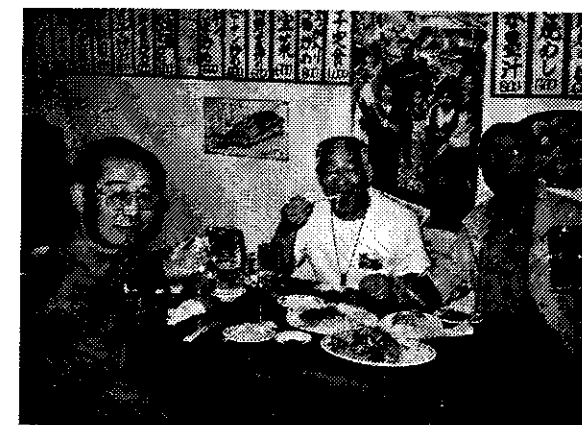
平成12年11月12日



さすらいの釣り人と
本日の釣果



中年3人組とオコゼ



創立35周年記念旅行

有限会社 南広 営業部長 安和 良一



20世紀最後の年、リスティング協会の新会員になり、諸先輩方へのご挨拶もそこそこに、創立35周年記念旅行に参加させて頂きありがとうございました。
(有)南広に入社もない私ですが、今回の旅行は、私の故郷、沖縄ということもあり、南雲社長の好意で同行させて頂きました。
沖縄では、母が一人暮らしをされており、私も3年振りの帰郷でしたので大変楽しみにしていました。

さて、千歳空港を出発し、3時間50分で南国沖縄です。昔はパスポートが必要であった沖縄も本土復帰してから早や28年が経ちました。
今は空港も新しく生まれ変わり、3年前の面影もなく大変便利な空港になっていました。

沖縄の気候は晴れ。札幌との温度差が20度もあり、会員の皆様も、さぞ暑さを感じたことでしょう。空港を後にバスにて一路南部観光へ……。

沖縄で南部は先の太平洋戦争における激戦地が集中している処で、悲劇の舞台となった場所です。という戦争で激戦地であった場所が集中している場所です。旧海軍指令部壕・平和祈念資料館など沖縄戦の実態にふれる度に、戦争というもののは残忍でこれほど悲惨なものはないと思います。

北海道出身の戦没者慰霊碑「北霊の碑」では、会員の皆様と共にご冥福をお祈りいたしました。

戦争を起こすのは人間です。

しかし、それ以上に戦争を許さない努力のできるのも私たち人間ではないでしょうか。

南部観光も終わりホテルへと。夕食会は琉球料理をいただきながら琉球舞踊を鑑賞しました。久しぶりに口に作る琉球料理、お酒、泡盛等々、故郷の味を満喫し酔いしれてしまいました。会食も終わりに近づき、沖縄では祝いの舞として代表的な「カチャーシー」となりました。

この「カチャーシー」は昔から結婚式など祝いの席では欠かすことのできない踊りです。私も興に乗り、昔を思い出しながらリスティング協会35周年を祝って踊らせていただきました。



2日目、中部観光へと。琉球村、琉球ガラス、パイン園、東南植物楽園、最後に沖縄観光のハイライト、琉球王国の栄華を誇る首里城公園を見学し、夕食は、ステーキ、ロブスター料理にビールで乾杯。楽しい2日間が過ぎ、私も故郷沖縄で母や友人とも逢うことができ楽しい時間を過ごすことができました。

リスティング協会は35周年となりましたが、私は36歳。リスティング協会とは同年代です。緒先輩の35年間のご苦労に感謝し、歴史ある協会に若い力を注ぎ、協会の発展に少しでも貢献していきたいと思っております。

今後共ご指導の程を宜しくお願い申し上げます。



沖縄写真集



札幌不動産リスティング協会35周年沖縄記念旅行 平成12年11月11日 於：科亭那覇



札幌不動産リスティング協会 沖縄観光記念 2000年11月12日 於 守礼門



万座毛にて



ステーキハウスにて



遥かなるキリマンジャロに挑む

小林住宅 小林 修



ヘミングウェイの小説で「キリマンジャロの雪」という短編があります。

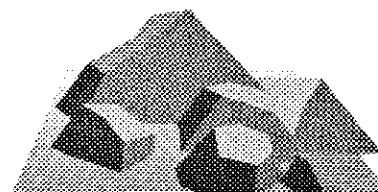
キリマンジャロは高さ19710フィートの雪に覆われた山でアフリカ大陸最高峰といわれている。

西側の頂はマサイ語で神の家と呼ばれている。

この西側頂上近く、ひからびて凍り付いた1頭の豹の死体が横たわっている。こんな高いところまで豹が何を求めてやってきたのか誰も説明したものは無い、との書き出しです。

アフリカは実に遠い国です。成田に一泊し、香港経由タイのバンコクに寄り、インドのムンバイに一泊してようやくケニアのナイロビーに到着です。

ここで一泊し、更に登山口までもう一泊しなくてはなりません。



赤道直下のケニアのナイロビーに着いたのは、8月8日の昼過ぎでした。気温は意外と涼しくて21度でした。約1700mの高地のため快適な気温でした。空港から市街地に行く途中キリンが2頭いました。木の形、乾いた大地の色もいかにもアフリカを感じさせるものでした。

ホテルの周辺は小中学生の音楽の大会に出席する学生達で一杯でした。

辺りの人々全部が黒人で私達はとても目につく異様な存在でした。下町は危険と云うことでホテル周辺だけの散歩となりました。

次の日は、ナイロビーからタンザニアの国境まで3台の専用車で行き、国境で別の車に乗り換えてバナナ畑の中にあるキボホテルに約10時間掛けて到着です。

途中、ラクダ、ダチョウ、ガゼル、ロバなどを観ることが出来ました。マサイ族が赤い衣装を着て棒を持ち、家畜を追っている姿も多くみられました。道路は直線で100キロ近い速度で古い車がうなりを立てて走ります。

町にはいとスピードを落とさせるため道路が盛り上がっています。いよいよ明日からの登山に備えて不要なものはホテルに預け、ポーターに運んでもらうものと自分で背負っていくものと分けて早めに床に入りました。キボホテルはキリマンジャロに行く人々の常宿というところで、80年位も経っている古いホテルです。各国の登頂記念の旗があちこちに沢山貼ってありました。

出かける朝、小鳥がロビーに舞い込みガラスに当たって落ちました。抱いて外のフェンスにおいてやりました。暫くして飛び立って行ったので山行きにとって良い前ぶれだと思いました。全国から山歩きに自信のある精鋭14名(内女性4名)とガイド1名の計15名がキリマンジャロの登山口マランゲイトに集まりました。

東京から10名大阪から2名、札幌から私の他に女性が2名です。地元のチーフガイド1名とアシスタントガイド5名、コック長1名とアシスタントコック1名、ポーター26名の総勢49名の大部隊であります。

各自の荷物の持分が決まれば

ポーター達は頭に約20キロ近い荷物を載せてさっさと登っていきました。

外国人の入山料は1人25\$程掛るようです。入山ゲートでは山小屋に泊まる人達の人員を調整しております。

第一日目はマンダラハットの高度2700m(道内で一番高い山、旭岳は2290m)まで約12キロをゆっくり登って行きます。

ポーターの歩き方はゆっくりとしながらよどみなく、実に美しい歩き方でした。



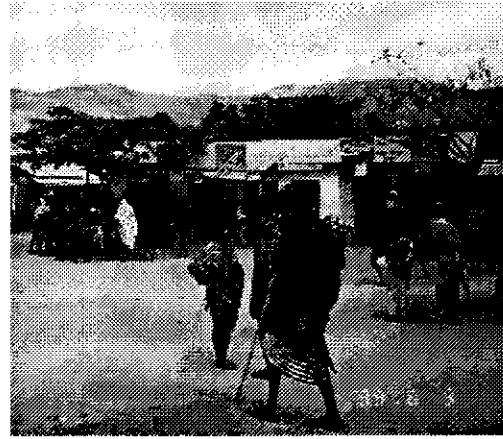
行き交う人々は「ジャンボー！（こんにちは）」と挨拶を交わします。熱帯林の中を時々見えるマウエンジー5151mやキリマンジャロを遠くに眺めながら予定通り5時間掛けて到着しました。登りはずっと緩やかで思ったより楽だと思いました。コックから早速紅茶とビスケットのサービスを受けました。夕食までの間、ガイド兼写真家の内田良平さんから「風景の撮り方」について話がありました。

山の写真は天を狭くいっぱい引き寄せること、バックが主役の場合は前景を3分の1にすること、前景優先の場合は3分の2を前景とし三脚を使用することを学びました。三角屋根の、下3人上1人の4人部屋にそれぞれ分かれ夕食まで団欒しました。山小屋は十分な広さと、清潔で、トイレも水洗でした。食堂は別棟の大きな建物です。夕食はスープ、パン、肉、ご飯、カレー、野菜など充分で美味しいものでした。今日からパルスオキシメーターで指先から酸素飽和濃度の測定が行なわれ97%で問題なし。利尿剤も持参したが夜中に2回トイレに行っているのを控えていました。

第2日目、7時朝食でストレッチ体操をして8時に出発です。ゆで卵、オレンジ、サンドイッチの弁当を持参し、ホロンボハットの3750mまで約15キロを途中で休憩しながらゆっくり登って行きました。6時間半掛けて小屋に到着。

この高さまでは1ヶ月前に富士山を2回経験しているので、何事も無く順調でありました。頭痛もなく食欲もありました。

実は富士登山1回目の時、ひどく疲れてしまい、これではキリマンジャロに行けないと半ば諦めかけたことがありました。その後、恵庭岳・羊蹄山に登り、最後にもう一度富士山に登り、少し自信ができましたがオーバートレーニングで左膝を痛めてしまいました。ホロンボハットに到着後紅茶にビスケット、ポップコーン等で団欒し、夕食もスープ、パン、肉、野菜、卵、トマト、きゅうり等充分の量と味でした。



酸素濃度は83%で少し下がっていました。脈拍は105でした。来る途中のホテルで冷房のため風邪を引いた札幌からの女性がいました。山で風邪を引くと決して直らないと言われましたが、薬を飲んでここまで来ました。辺りは首の後ろが白いカラスのような鳥が飛んでいました。また、ジャイアントグランドセルという椰子のような奇妙な植物もありました。夜トイレに起きたときは満天の星で暫し見入ってしまいました。

第3日目はキボハット4740mまで初体験の高度であります。高山病対策として、ゆっくり歩くこと、水を沢山飲んで水分の循環をすること、深呼吸をすること等・・・で予め薬を飲んで予防しておくというわけにはいかないのです。高山病を軽く考えて無理をすれば、いとも簡単に死に結びつく危険性をはらんでいます。

今日、キボハットまで来るのにとても疲れしました。山小屋がすぐ目の前にあるのになかなか到着しないのです。食欲も無く昼の弁当はポーターにあげました。

この日の酸素飽和濃度は64%、脈拍は安静時で129で危険な数値を示していました。

午後の紅茶だけを飲んで、夕食もほとんど食べられない状態でした。明日は午前0時起床で最後のアタックの日です。下着もズボンも真冬用に置き替え、上着も新調したダウンに着替え、早々とベッドに入りました。

第4日目、起こされて目が覚めたのはなんと朝6時でありました。既に出発後6時間も過ぎていました。・・・どうして？・・・と起き上がろうとしたが磁石に吸い着けられたように体が動かないのです。ポーターが手伝って起こしてくれたが立てず、ようやく肩を抱えてもらって立ち上がったが、よろけて崩れ落ちてしまいました。目もチラチラしてはっきり見えなくなってしまいました。咳が出て喉が引き裂かれるようで、これがとても苦しいのです。ベッドに戻り暫く横になっていました。

今度は一人で起き上がりストックをついて外に出ました。傾斜面でよろけて転んでしまい自分一人で立てず、ガイドが手伝って起こしてくれました。オシッコが全然出ないのです。

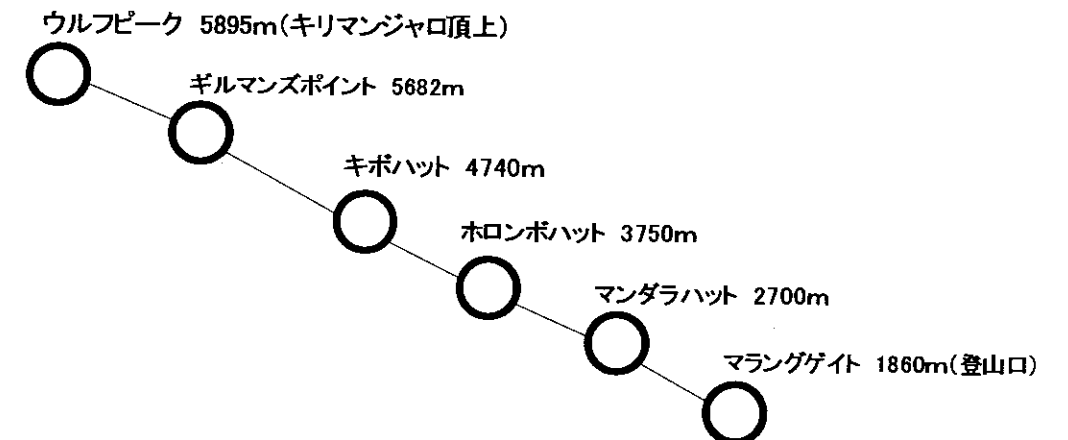
隣のベッドの女性が意識が無く、呼んでも返事ありません。札幌から行ったもう一人の女性が私に靴を履かせスパッツを付けてくれ、ダウンや寝袋をザックにしまってくれました。

彼女は少し頭が痛いくらいで元気だったのです。彼女は友達の意識不明の女性を一輪車の乗せ、ポーター4人と共に付き添って下山することになりましたが、一輪車はあと1台しかなく、あと2人の意識障害の男性のうち、1人はポーター2人から両肩を支えられ足を引きずるように下山しました。日本から持っていたガモフという高圧酸素ボンベの中に高山病の人を入れ、空気をポンプで送って加圧したが効果はありません。女性の人には酸素吸入をしましたが、効果はありませんでした。

午前0時に山頂に向かった人は6名で、その内3名（男性1名、女性2名）はギルマンズポイント5682m迄行って引き返しています。その男性が何か云っているのだが、何を云っているのか意味不明であった、と女性が云っていました。意識混濁の状態だったのです。

残る3名はウルフポイントの5895mの登頂に成功しました。3名も胃がひっくり返る思いで全てを吐き出し、マイナス15度の万年雪の中、手足が凍る思いでようやく成功したということです。

その日6名は3750mのホロンボハットまで下山したが、さすがに疲れて夕食時には姿を現しませんでした。



私は自分で動いている間にだんだん歩けるようになり、自力で下山できるようになってホロンボハットまで下山しました。食欲は殆んど無く咳が出て喉が痛くて、しかたがありませんでした。下山するにしたがってオシッコも出るようになりました。次の日はトボトボと登山ゲイトまで行き着くことができました。靴紐がゆるみ爪先が痛かったけど直そうともしませんでした。どうでもよく、直そうとする気力もありません。後で指先を見たら、爪が黒くなっていました。キボホテルで遅い昼食をとり、ホテルで預けた荷物を撤収しアリユウシャのホテルに夜8時頃到着。風呂に入り着替えてサッパリしたが食欲は余りありませんでした。

病院に入院した男性一人は次の日から私たちと同行できるようになりましたが、もう一人の男性と女性はナイロビーの病院にヘリコプターで転院し、その時は意識は戻っていたようですが、結局私たちと一緒に帰国は出来ませんでした。

次の日は再び国境を超えてナイロビーに泊。ナイロビーからドバイ、バーレーン、機内泊で香港経由成田に泊し、18日に帰宅しました。
うんざりするくらい飛行機に乗りました。その間ずっと食欲はありませんでした。帰国後体重が5キロ減っていました。また、病院に入院していた女性は5日後の23日に帰国しました。

5000mを超える世界は空気の密度が2分の1以下となり、意識を奪ってしまう恐ろしい世界です。セスナもヘリコプターも通常飛ばない空域です。
それにしてもこのような悪い結果はなんだったのか？他の旅行業者ではホロンボハットの3720mで、もう一泊しています。今回はその予備日がなかったせいもあると思われる。6時間遅れたらもう帰らざるを得ないのです。



振り返ってみて、私にとってどんな意味があったのか？一概に申すことは出来ません。

ただ、私の行きたい山と、登れる山は別だったのかと思います。山頂に立てる確率は5～10%位だったので、難しいとは思っていましたが、半年前から準備をし、行く直前には富士山に2回も登り十分なトレーニングをして、登りには自信がありました。

高山病は個人差があるとはいえ、もう少し何とかならなかったものか・・・と無念な思いをしています。しかし、私の高山病は重症の状態だったので仕方ありません。

帰って来てからのレントゲン検査の結果、肺炎になりかけていました。風邪薬、抗生物質、咳止めの薬、点滴などの治療を受けました。しばらくは左太股がしびれていて、自分と体は別々の感じがしていました。

しかし、またの機会があれば、もう一度挑戦してみたいと思います。

平成11年8月31日

塩谷ゴロダ浜 海水浴



平成9年8月 塩谷 大久保別邸にて

LOLC

(リスティング アウトドアライフ クラブ)



H11.6 ピンネシリー吉田岳ーアポイ岳縦走



H11.4 百松沢山

創立35周年記念誌

発行年月日	平成13年3月31日発行
編集発行	札幌不動産リスティング協会
編集委員	田村政義 源藤義幸 中山 勝
印刷所	(有)幸印堂
	札幌市北区新川4条4丁目1番60号

編集後記

突然の指名により、創立35周年記念誌の製作・編集を担当することになった田村・源藤・中山の3人は、当初10頁程度の体裁を考えていたものの、いざ製作を始めると予想外の追加で、あれよあれよの間に30頁を超えてしまいました。田村委員が原稿をPCでワードに打ち換えて編集者にメール送信し、源藤委員は写真や資料を集めながらの悪戦苦闘の結果、何とかこぎ着けられた・・・が実感です。

今回、初めてCD版を同時配布してみました。前例が無いがために手探りの状態であり、見難い面もあるかとは思いますが、これを機会に少しでもPCと仲良くなれたら・・・と願っています。

また、慣れない出稿やお手伝い等にご協力いただいた方々に、心から感謝申し上げます。
(中山 勝)